

リバタリアニズムの概況と課題

高崎将平 (Shohei TAKASAKI)

東京大学

本発表では、本ワークショップの主題である「ロウの新しいリバタリアニズム」のイントロダクションとして、現代の自由論におけるリバタリアニズムの議論状況を概観した上で、ロウの立場をその中に適切に位置づけ、どのような点でロウの立場が「新しい」のかを明らかにすることを目指す。

リバタリアニズムとは、簡潔に述べれば、決定論と自由の両立可能性を否定し、かつ自由の存在を肯定する立場である（したがってリバタリアニズムは、非決定論と自由の両立を肯定することになる）。しかし現在、非決定論と自由の両立可能性に対しても、次のような反論が提出されている。

(1) もし行為が非決定論的に（確率論的に）決定されるのであれば、行為者がどの行為をなすかは単なる運（または偶然）の問題に過ぎないのではないだろうか？そのような運任せの我々の在り方は到底自由とは言えないのではないか？

この問題を「運問題」と呼ぼう。運問題は現代のリバタリアンの頭を悩ます問いであり、これに対しさまざまな解決の手立てが提案されてきた。だがそれらの提案が仮に運問題を解決するものであるとしても、なお次のように問われることだろう。

(2) リバタリアニズムによる自由の説明は、我々が合理的な行為者であるという側面を適切に反映しているか？（以下、「合理性問題」と呼ぶ。）

(3) また、その説明は我々の自然主義的な認識に照らして理解可能なものであるか？（以下、「理解可能性問題」と呼ぶ。）

例えば我々の自由な行為の在り方を「不動の動者であり、絶対的な行為の創始者」とあると説明したとしても、この説明は（それだけでは）明らかに(2)及び(3)の批判を真っ向から被るだろう。というのも、この説明では行為者の「意図」や「理由」が行為にどう関わっているかが全く明らかでないし、「不動の動者」としての我々の在り方を現在の科学的見地と調和させることは困難であろうからである。

本発表では以上の三つの問題点をふまえた上で、リバタリアニズムの中で競合する三つの主な立場を検討する。その三つとは、行為者因果説、出来事因果説、そして非因果説である。以下それぞれの立場を素描しよう。

行為者因果説は、出来事のふるまいを決定する「出来事因果」とは還元不可能な「行為者因果」を措定し、その行為者因果を根拠にして我々の自由なあり方を説明するものである。古くはバークリやリードにさかのぼることができるこの見解は、現代ではオコ

ナーやクラークなどによって擁護されている。

出来事因果説は、自由な行為は欲求や信念などの先行する出来事によって（あくまで非決定論的にはあるが）決定される、とする立場である。この立場は「行為者因果」のような新たな因果概念を導入しないという点で、先の行為者因果説と明確に異なる。本発表ではケインの議論を中心にこの説を検討することになる。

非因果説は、先の二つの立場と異なり、自由な行為は因果的な説明を必要とせず、あくまで「非因果的」に生じると考える立場である。非因果説論者が因果の代わりに自由の根拠として求めるのは、典型的には「意志作用」(volition)や「行為者性」(agency)といった行為者の内在性質である。この立場の代表的な擁護者としてはギネットなどが挙げられるだろう。

では、以上の三つの立場が鼎立していることを確認したうえで、ロウのリバタリアニズムの何が「新しい」のか、これを発表者の視点から捉えることにしたい。ロウの立場の「新しい」点は、従来の行為者因果説と非因果説の（ある意味での）調停をはかっている点である。そしてこのことを実現するためにロウは、従来の因果理解の大幅な改訂を提案している。ロウによれば、世界の状態を規定するのは出来事因果ではなく、「実体因果」(substance causation)である。ここで実体とは行為者のみならず「爆弾」などの無生物をも含めた概念であり、よっていわゆる「行為者因果」は実体因果の特殊ケースであるとみなせる。この実体因果をベースにしたロウの因果理解の特長は、行為者因果の存在を認めつつ、形而上学的に疑わしい「新たな因果概念」を措定するという従来の行為者因果説の懸念を回避している点である。

上に述べた実体因果概念をふまえ、ロウが自由な行為をどのように説明しているかを簡単にまとめよう。ロウによれば、行為者が基礎的な行為（例えば手を挙げる、など）を行うとき、それは「意志することによって」なされる。この意志作用の存在こそが行為者が自由であることの根拠であるが、重要な点は、意志作用そのものは先行する原因を全く持たず、完全に「自発的に」(spontaneously)生じることである。これがロウの非因果説に基づいた自由な行為の説明の要点である。

ともあれ、以上のロウの「新しいリバタリアニズム」が成功しているか否かは、彼の立場が先の三つの問い（「運問題」、「合理性の問題」、「理解可能性問題」）に適切に応答できているかどうかにかかっていると思われる。この点について発表者は簡潔な所見を述べるに留めたいが、ロウの立場についての詳細な評価は本ワークショップの議論全体をもってなされることになるだろう。